大和物語

淺井氏藏書之印
淺井氏藏書
文曜文庫

獨良利物右今ノ但者出家ノ号寛達ノ方字ヲ殿上法師一圓基之猪侍也四方ノ事ヲ聖大徳延喜十三年
五月ノ五日碁聖奉勅作ニ碁式献之ニ

王維川旅舘望南山有ㇾ作詩ニ
雁外無ㇾ書切ニ客心ヲ
有ㇾ夢到ㇾ家ニ多ク下ㇾ淚
右ノ詩ノ韻ヲ次テ
山谷
立更帰夢常ニ多シ
苔短一寸ノ容ヲ悲ム

陽成院

元良親王
清蔭
源姓
如ㇾ紀氏号ニ紀君ト

故源大納言宇相ノ中将ノ
清蔭於ㇾ遠作者
ところ尋ニ参リ侍ケル時ニ
寛蓮大僧都ノ
時平ノ女宇多帝ノ
御息所ニ
侍ケル
源大納言
清蔭
源姓
如ㇾ紀氏号ニ紀君ト

（文字ニ表也　然ナテモカヘラヌ(?)カク見苦シ(?)八人ノ…今ハ…モナシ…心ヨリ催スル…トイヘリ）

まひぬれはいまはとてかへるとも

こゝろにもあらぬなかみさかりけり

五

あるかたの中ねの女ゆくへわかれける人(?)よしのひて（三条ノ右大臣ノ男）（今ハ前坊ノ思ヘトモトシ）

あひみてりけるを女もおもひつゝすまひけれとなり

みのれとくのかのへにかりけるかりくそてりけりきて

（松忠モ女モナシ）（大和ノ丈也）ものいとわりましとおもひかりそてよきころ

こゝまてかへりけり（空蟬ニ伊与ノ介ノ下リケルニヨミシモ今日ノ川ニモ二度ニ相方シラヌ秋ノ暮哉此歌ニ似タリ）（夕白、空蟬ハ伊与ノ介ノ下リケルニヨミシモ今日川ニモ二度ニ折方シラヌ秋ノ暮哉此段ノ仁セテ夕白ノ巻ニ書ケル也）

まくへ風のまつ[illegible]井をいかにもく

こゝろかさそらすそてなかりなん

六

とかくそりけるに(?)ひ風りけり

男女おもひかはしてありけるを（誰トモナシ　ヨミ人不知歟）

わかくそりけるをいとうれしとおもひてけれは

まとおもひいかけしとわかくそうかしてつかはしける

うゐまうれ男も家にかへりくかれなんさ

まりけり

あくるつとめていかゝおもひけん

かへさいかにしもひのりとおもひやりて

みかへりしぬるのりそもりけり

七

女いとおかしとおもひけり（松並ナトノ人ニヤ）

世に(?)名(?)たかくかくれなき兵部卿のみこ（兼明親王歟）おはしけり

とかのおもゝれとよひにかへりなんてそのさ

まりにいそのいゑてけり

おふかのみるにおとこそかさう涙（我斗ナラテ又コト心モオハシヘスヤト恨テ）

ひとおもてりのみくしくおもては

とおりかくかくりけりまとおもふも

かんおもひのことかれ(?)ける(?)てくひとさしもく

[illegible]

（後撰　逢ことのまちこくて君にこゝろをつくしつるかな）

（后宮ヲ退キ奉テ後モ尚退出セ
ズシテ候ハセ給ヒケリ）
（清蔭ノミ息有テ）
（清蔭ヲ）
（於迷ニケリ）
（於迷ニケリ）
（清蔭）
（彩石今ニ）

（沈初語真ニ陽成院ノ一条君ヨリ四人元
（一条君ヨリ）
（延喜）

二条院崩御ノ
定方ノ女也

七

大

拾遺物名
オカハ橋
筑紫ヨリ迄ニテクレトツトモサレ太刀ハタ川ノ橋ノミツアル

続古今ニ遍昭トアリ宗貞ノ時ト云

[illegible]女のまくらり
続古今恋五 遊命
ひとつ心のまくれしれ年老ぬとも
[illegible]
かしこまりつゝまにれ年老のよし
続古今恋二 僧正遍昭
[illegible]

廿二
[illegible]
とかれの[illegible]

[illegible]
続後撰中 良峰宗貞トアルハ別人ニアルヘカラス
[illegible]

廿三
とよりけるは監命ぬめてかへりてけり
て座り家り
陽成院の三のみこ 元平親王 後藤の中将のむすめに年
古今作者中納言有徳男
ころすみ折節女をとえあそ侍りけるに
寛平御子五皇女 後撰ニ女五宮トアリ
[illegible]
恥シクモウラメシクモ思テヤ章子ノ内ヘ隠レ給ヘ九十九ヽ
[illegible]

宗于 勘云一品式部卿本康親王ノ一男 寛平六年正月従四位下 又三光院殿説云 光孝天皇ノ長親王宗于ニヽ 但両説共ニ天代系圖ニ不載之如何

とよまれたりけり

廿九 右京のかみ宗于の君なり（官位ヲモアガルヿ也）いつへきほとに我身の
えなりいてぬことゝおもひたまひけるころほひ亭子の
みかとに紀伊国よりいしつきたるみるをなむたてまつり
けるを題にて人〳〵うたよみけるに右京のかみ

おきつ風ふけゐのうらにたつ浪の
なごりにさへや我はしづまむ

（餘波トハ催馬楽ニ風シモフヒタレハナゴリシモタテレハトアリ 梁塵愚案抄ニ葉宸作ニナゴリハ風ノ後ノナゴロト云 同ト侍リ然ドモ此哥ハ只アラキ浪ノ名ニハアラズ 此哥心ハ我身ヲ水底ノ塵ニヨセテナリ 篝木ノ身ハシヅミ位ニシロリトアル詞ニテ我ハシヅミナム心得ヘキ）

三十 おなじ右京のかみ監の命婦に

よそなからおもひしよりも夏の夜の
見はてぬ夢ぞはかなかりける

（一ジ逢ミザリシ程ニヨソニコヒシヨリハ夏夜ノ短キ如ナル逢セハイヤハヤナキト也）

（此哥 新千載恋四ニ入 題不知）

卅一 亭子のみかとに右京のかみのよみてたてまつりける

あはれてふ人もあるべくむさしのゝ
草とだにこそおふべかりけれ

（此ハノ王ナリノボラヌヲ此院ニウツタヘテ御ガヘリミヲ願フ心ナルヘシ 草ハむらさきの一本ゆへにむさしのゝ草はみなからあはれとぞみるノ哥ヲコメテ也）

又

しぐれのみふる山里の木のしたは
をる人からやもりすぎぬらん

（此哥モ身ノ沈ミタルヲナゲケリ也）（居人ト折人トヲカケテ云ゾ）

とありけれはみかと御らんして
みかとはらんしもなにの心もえたまはすとて
そのひ（八木勘）の君になんみせ給ひける
ひかへかんありけりとなん（宗于ノ也）

卅二 躬恒か院（宇多帝ニヤ）にてよみてたてまつりける

たちよらむ木のもともなき蔦の身は
ときはなからに秋ぞかなしき

（トキハナカラニ常住ヤナシキ中ニモ杉ハトリワキテト也 蔦ノハヒヤル木ノ下モナキニ我身ヲ立ルタツキモナキヲ云 ツタノ身ト云ヿヲ抛身ト云フヲ 物ニツク身ハナルモアルヲ木ノモトトヨルニヤトソ 積攷 のかみへまし木のもとたよりなく ひろひて年をへぬる）

（ヨモ花ノ色トモ心ニツカストモ也）

（兼輔也）

（仁和寺ノ山也　寛平法皇未ハレニス也）

（梅ノ木ヲ文ニ我身ヲヨソヘ人ハ花ニテモアルヘシ）

（承ヲ内親王ト号多皇女也）

（女宮ヲ竹那ト云由ハスノ詞ニ侍ニテ其心明也）

（物名ニ）

（清和ノ子貞平親王ノ女也是ハ従五位下伊予守ニテ出家シテ法名ミエスト可尋）

（北ノ帝ノ御下ニテ名ハ従吾ノ事ハ物語ニ侍ルモ従吾ノ事ニハ不可及凡人ニヤ）

（勘員ニヤ未勘其人ノ）

十三仲子ハ四子ナリ
延喜皇子彈正尹
章明親王也母ハ
桑子業俔女也

スヘキ文トハ千台ヲキルヲ也

業俔ガ家ノアヤ曽祖也

衆心也

平仲 平良文四子
字仲月号ニ車扨
平安凡男 妓ハ
十野親王之孫茂
世王之子

古今ノ作者或説宗于

中絶ヲ古ハ何トモ思ヒニクキヲ也

助字也

我ハフルサレルヲ忘

異本ニハかいせうトアリ

四十八　博様（バクヤウ）博奕也　孟子云博奕好飲酒不顧父母之養二不孝也

うらみさへおもひもあへすおもひける（浦見ニカケタリ）

陽成院にありける坂上のとをみちといふおとこ

ゐんにさふらひける女をおもひてかよひけれ（手ニ思アハレナカラサルコアリテ併ニエアハサリシ也）

わきもこのそてやいかなるらんとしつらん

あけきたりのとりかへらん

四十九

おほかたのこころもゆくさのまにまにかはりけるを（又説ニ人ハト句ヲ切テ供養ヲシテ也佛道ヲ深ク求ル人於妻子ヲモ放下シテ尋）

つくつくとおもへはおほくのこころ（常ノ人ニ厭レウトマルルコモアレハ世サレハ足ノ向ニ方ヘト云モ要無世ノ身ト捨果ツル人ハ何心）

もおほはのしりのゆんとそのかへりきけるさ（ヲ用ヒテイツチユカントモ思ヒ侍ラン只足ニマカスルハヤリヤ）

てかりひとつのかはりのとこそたかりそり

しをりしてゆくみちひとそれ（深山ナトヘ入時ニ木草ノ枝ヲ折カケナトシテモト来シ道ノシルヘトスルヲシヲリト云也サテ心ニ思ヘル女タチモナキハヨリシテ行ナトヨメルニヤ）

いつらしをしらぬやりしものせし

五十

男のありかくなひける女をおとこて人のかたへいふなり

いつしかまたるるあふひてこそけふはふたたひ（田舎ノ男ノウセタル也）

ある人はいつくゆかしもし人をあはぬ

うつりとふけてゆくそ

とかくのひける

五十一　兼盛　駿河守従五位下後贈従三位　紹運録云是忠親王─興雅王─篤行─兼盛

兼盛のおほきみのかへりに（後拾遺作者也　太政従四位兼茂女　兼茂ハ良門ノ孫利基ノ男）

こころならすこまてまたいふすへからんを

かくされはかならすも秋となりにさきは（後撰　讀人不知）

かくとまつしなましせてそゆく

女返し

こひしとこそゆかせたりなれはかりても（後撰）

人のみとおもひけむ家の秘（此女ハ実ニモカレツギ千年ノ入ル）

五十二　中興ハ勘云昌泰元年蔵人延喜三年大内記四年任近江守後左衛門権佐

近江介中興かむすめをもちてつかうまつりけるに

後撰詞書ニ昔男ニ〻ケル女ノ鬼ニツキテ人ノ国ニオチ君ダニヲサヘテ守ル人ナシトイフツカヘニケルト侍リ後撰ニハカヽラデ

同院 勘云 女二

負元親王 清和 才三 母典侍仲統女

三ノミコ 従五位下源 兼信 負元ノ三男 重之父也

哥於遠ニ詞書ニ三年ノチニ石塚ト云所ニ源重之カ妹有女テツカハシケルトキ

礼記内則篇云 十有五年而笄二十而嫁 女二十三年而嫁ス

兼盛ハ平姓ヲ賜テ

統紫日本紀纂疏云統謂者地狄伏
先和名曰都久俗謂早附之鳥也ノ鳥ニ似ル故ニ云ト云ヘリ

十四

ト云ヒケリ

十五

ケル物語ノ奥山蔭中納言ノ事ヲ書ケリ

（物ニ有ケル也ト訓ヨ好ミヨムヘシ）
（喜愛トイフ心ノ事ヲ書ケリ）
（阿佛房ノ尼傳ニ侍リ）

（温ノ字也ウラミ果ル心也）

（物語ノ事ニ載ル也）

（宇治ノ拾遺物語ニ載ル也）

（京極ノ御息所ハ帝オリサセ給ヒテノ後ニ参リ給ケル也）

（時ニ付テラレシヨリ我ハト思ヒ上リケル人々ノ思ヒ忘レ給ヒケル也）

（作ナセ給ケル由侍リ）

（亭子院ノ事ヲ書ケリ）

（亭子院ニ上リ給ヒシ事ヲ書ケリ）

（河原院ヘオハシケル事ヲ書ケリ）

（河原院ヘ御幸ナリシヲ思ヒ出テ詠セラレケル也）

（京極ノ御息所ノ靈ノ出来レル事ヲ書ケリ）

（河原院ニ上リ給ヒシ事ヲ書ケリ）

（世續ニモアリ）

（衆生喜見ボサツト云ケル時燃身燒臂シテ行テ佛ニ供養シ給ヒシ深キ心モコモルニヤ）

（茅王菩薩ノ普一切
衆生喜見ボサツト
ハケル時燃身燒臂
シテ行テ佛ニ供養ス
シ深キ心モコモルニヤ）

昨日ノ例トハ例ニ依ヨリ人タリ云ヒト寵愛セラレシヲ院ノ御モ憚ニカリニヨシ也
世ハ何ノ
末ノ二此例ヲ引ヲモ

南院
於次抄云四条北生
六十
兼香殿ノ息所 愚按
御子高勝女 後嘉帝
母石号兼香殿ト
内外カルトハ伊与ノ
介ノウチ(ニ)ルトヨリ云ヘシ(テ)也内外ニ憑ヨカロ
スキヤケモミユマヒレキヨリ白セテヨメル也

光孝皇子
是忠親王家
勅物云是忠親王 没応二年式部卿宮子息名字不見ク奥ニモ南院ノ七帝君ト
アリ
兼香殿ノ官名也
妾ノヨロシク奇也

下句徒カメキト云ヒノ字ヨメリ
亀山ヒト兼香ノ
トイヘリ
ソノヨシ云ヒ別ニ

六十一

六十二

古文前集杜工部
茅屋為秋風所破歌
床ト屋漏無乾處
雨脚如麻未斷絶

前九段ノ監命婦ニトリアヅケテ

ヤタノ心ヲ為ニトテ奥ノ心ヲシノバヤラヌヲ愛ニヤミエツラントト也

監命婦ノ家也

梅ノ花ヲカザシ題也

上

篠塚驛 奥州也

いまやくト云事也

敦慶親王

勘云喜種正五位
下美作介従三位
刑卿長猷男清
和源氏也

五文字サシアメリミナト云訓也俄ニ迷ニ好ム也

七十四

山哥ハ度逢テ名

宇多院 於牧云西京 寺門北木辻東 此小路當東ノ院法 皇御所 刑ヤマ 源氏宅ニ

七十五

南院ノ君々千今集 前ノ宗于勅物忌忠 親王男ト三光院詠ス 王代系圖ニナレト証セン ヤトオボユル條ヨシミル ニ宗于ハ南院息世疑 ニヤ

李庵

右少將 俊左位上雁鳥 ノ

七十六

宇多院ノ崩御ノ後ナトニヨメレニヤ

人号文野少將 眞作之未友原子業男

要縄乃

於遺作者 穏子昭宣公女

敦忠 時平公息 天暦六三月七薨三十七

大鏡ニ世ニメテタキ和哥ノ上手管絃ノ道ニモスグレ給リキ ニカク給テ 中將雅ニ位ノ時メクミ敦忠中納言ノイマセシ時ハ管絃ノ道ニハ三位ナノ世ノ大事ト思ハレハヤラレ由モ侍ル

七十七

ヤリニハアハレトハ深リ

礼メタル中ニハカリアリメゴトニハトイフコトモ

リ駒山 山城ト 下奏ニモアリ

七十八

桃園 於次云
一条北大宮西世尊寺南
保光ノ家ニ御遷幸
原保光号桃園中納言
代明親王ヨリ世定方女
一従於皇子

心ナゾサトス詞也土佐日記ニ物ノ心ヤリヨメルトスルニ同シ

サノ我ヲヘタルノ字ヲシントヨムヨウケテルニツケテ男心サヒヨクル也哥心

絶果ヌヘシアヲサキルサニ独君ヲ心細リカホニ八ト也物ノニテ細キ（斜絶ヘ

室トヲ物ハヌリコメニ

物ナルサ紀伊ノ手捷郡ニテ

テアヘヤナル女

（卧ト念ト通ス）

（剛）

動云内通ル藤真行（ママ）於遠ノ作者

（ママ）

（ママ）

相坂ハ今アヒ坂ト云ヘリ
音ハ夜モ立ツヘケレト

ヤラハ厭也心ヲ君ニ

葛洪西京雜記云梁孝王苑中有落猿巖柟樛池鶴渕鳧嶋島諸宮觀相連奇異(果)佳樹現禽異獸靡不畢備俗人言(梁)孝王竹園也

後撰ハ詞書ニ式アマ
すけハいかゝと
ゐみよニアリ

古今ニ「君をのみ思ひこし路の白山」トアレハ甲斐ニハアラヌ也 後撰ニハ二ノ句白雪降リ 四ノ句今はこしちも

九十二

おなし右のおほいとのゝみやすところみかとおはしまさ
なりて後式部卿の宮なむすみたてまつり給ひける
いかゝありけんおはしまさゝりける比斎宮の御もと
文たてまつり給へりけるにみやすところ宮のお
はしまさぬことなときこえ給ひてはしに
しら山にふりにし雪のあとたえて
いまはこしちの人もかよはす
となんありける御返しあれと本になしとなん

敦実親王 宇多皇子
柔子内親王 宇多皇子 敦実ノ御妹也
甲斐国ノ名所ナレハイヒニカケシチイトヨミ給ヘリ

九十三

九の君に侍従のさしおかせ奉りける
おなしこゝろ御息所をまつとこそたのみしか
かくの君の左大臣のおほいとのゝ
こゝろもとなく思ひぬとてなむかくいひける

小野宮左大臣實頼 号清慎公

貞信公北方ハ寛平皇女モアリ能有女モ侍ケルナ
ノ娘ニ別ニ左大臣ノ

九十四

なかつかさの宮の御息所ノヨルカタハシラヌト也 よみしのきさいの宮のすみ給ひける
おほきおとゝのきたのかたうせ給ひてのちの月
かりて侍りけるに (左大臣ノ母菅原ノ君ト侍ルハ寛平ノ皇女ナレハ是ハ能有ノ女ニヤ但次ノ段ト同人ト侍ヲ也)
あはれなる事のかすに 貞信公

九十五
おなし太政大臣のまかり 清慎公
かれも月日のうつりゆくを 人面桃花
けふまてありける

崔護
去年今日此門中 人面桃花相映紅 人面祗今何処去 桃花依旧笑春風

菅原君 勅云 寛平皇女源氏 頼子母ハ菅承相女ナラン

禁色ノ宣旨 勅云 貞信公昌泰三年正月廿八日参議二十三

七条右宮温子寛平ノ右昭宣公女貞信ノ帥ナ右ヘ院ノ中セウシコノ泰サヲ貞信公ノ謝ヒ卜約地

院ノ内ヲそこのいとうりてくゆり

さま仰ありなとゆ

服衣ヲスリカキ人ノ忌ノヤキリヒモヤ其右肢モナリチヲ

一ヨヒシ北方ハ寛平皇妻ぬ

ヒハカメン色ハ至アリケリ也

勅ヲ負信公ニ賜ル中弁而西位侍従在衡ニ

九十二

弁卿幸真有ヒラトシ高立ノ井ヲ作ラまりゆ

秋山ノ水精吟山峡ヲト云題ニテ九首アリトノ作ヒラミヒラチ、キヲト卜井ヲト時ヘトモ

ヒ行ヲ幸ヲみ

ヒ行ヲ幸ハ延喜年八月トカヤ

七ヒセ

大鏡ニハ紅葉ノ色モ心アラトアリ

於近

とうつまきり

ゆまのひとたりて

となんをなくて

ゆもうわるあとなりて

ゆうめのひ

大井ヲ季縄のおすて

乱りうく我ありうき手ヲ引らんせんてありも

ヒヲまりうまひうとうりこ

おる

ヒりあまこうる

そうのやまおうくりり

とりうれいおうくいそれあり

井ハ帝イツレノ時ニカ宇多院ヒ

井ヲ

まてなんからんしけ

あるのしかあるつまひおとそ

そとりて関まりなる忠のさき

掃部助おく差へりけるあろりそのうん

あすけおわのくひそろ

なりそもそもそもも

なんまりうろ志こ

そそわそそりまりう

ひそそまそそめ言

りおそをんをせなり

右

そのうん

神楽ノ阜歌ニ

コノ文ノミヤトヨシシヲ

トニツトアルヲ梁

塵愚案ニ陽

明門ヲ称セト侍リ

於赤云楊明門東

面又云山氏造之

五間戸ニ間号近

衛陣門ト北端ニ

そのそれりそわさまり

りひおふのそのの一部と

里なまひおりとひく

使イヲくおれ故ヲ廿ヲモ安ニサリシヲ又

うくはこれまひ

忠禁中ニ座セ

ひまそりすなりてまれ

セチニ心イラル、共ニ友ノ情サモアルシ

ひおそれ乃ひおへ

そおそのりてそ

こひりまてなおのうひあ

なりくそりまて

なりニアルカノ年ヲ延喜帝ノ賢シ給セ

りそニアルカノ年ヲ延喜帝ノ賢シ給セ

志抗もおわりけるおりけ

奥式井ニ同云ソノカ
ヨメル心ハイカニ答
云ソノカミハ當時トモ
タル女ノ詞ニモソノ
ソノサハキナトアリ當時ノ
テ其時切リコモト
思ヘハ心ホソシト也

百

ましてかくおりてえなりけるにあはれにおもひて
ひしそうなりけりよ
ゆくへもしらずなりにけりそのかみの紙
しやかのまうでを
（ミトハカニニシカヲ云也文ニ當初ト手ルニ酒井人真カ病臥テ山里ヘ行時ノ哥ト云）
（其折トカクセサレハカニニシカタチモイマユリサキテモイハニトカナシ大和物語ニ生田海ニ身ヲナケ）
（ヤニ親イミシ當時ノコトモ見エズアヘズ侍トモ云物語ニテハカナシナハ當時ノ心也ナシ哥心ハヨノ）
（云ヨナク是ハ限リト）

平中いろごのみけるさかりに市にいきけり
中ごろはよき人々市にいきてなむいろごのむわざはしける
それにきさいの宮の御たち市にいでたる日
になむありける平中いろごのみかかりて
になうけさうしけりのちにふみをなむおこせたりける女ども
くるまなりし人はおほかりしをたれにあるふみ
にかとなむいひやりけるさりければ男のもとより
ももしきのたもとのかずはみしかども
わきておもひのいろぞこひしき

（色好トハアツヱル人ナト見エタリ）
（後涼殿后宮ノ女房也）
（市ヨリ車ニノリテ也）
（ヨミカケレハルナルヘシ）
（百敷ト云ヨリ袂ノカズトヨメリ面白ク侍ニヤ）
（緋ノ色ヲ人ノヨメリ武蔵守女コキモヒチリキタル故也）

コキカイネリ
濃掻練也表裏紅ノキタル物ニテ中臺アル女ノ装束也末摘花巻ニモキ菲アサニカイネリコノムハナノ色アイヤミエツランハトアリ

枕草紙ニ云子ツブル物見ベキ折ル人ノケサノ文ノヨソ手女人サヘムネツブルトアリ

といへりけるはむさしのかみのむすめになむありける
それなむいとこきかいねりきたりけれはなむ
さなむありけりさればむさしのかみのむすめ
ひつきなきのかたちおかしくなりにけれは
かきおこせたりけるにかへしもせでおもひける
しけるをとこおほかりけるにせかくあれ
ありけるをとせちにおもひけれはそのをんな
なにかはとおもひけれはせめてとせし
うしとおもひしてそのひまにとりてせん
ありけれはたしかなることいはで
そのまうでとしこかへり
ねそこそこそりゆきてまかりありける

（平仲ヨギナキサカリアリトミヱ）
（仕人トモノ詞也）
（ハヾサウラヒケルニハ息ヒアカリテ逢ヌナドトシ也）

後撰作者
勘云藤滋幹
大納言国経男 百二

平仲身上ナドアリテ云ヒイラサルノタメナルヘシ
ナヲ云ヒヤルヘキトコロナシ
我来レリトイヘ也
葦ニ門サセリテ人ニ問ヒ
誰トモナシ
妙吉祥ヨミ人不知

百二

直ノ字ニヤ伊物ニメ
法華安楽行品云
諸浄業等尽勿親
近又云乃至為法猶
不親厚況復餘事

浄蔵ヒジリキリテ葬馬ニ入タル尼心ノ着ハ離メナルヘシ
ナホニモヤリシト也
世ハヘルニヤ
墨染ノ衣ニテ札詞也下ノ句ノ心ニハ京ヘ
カヘリ行ヘカレトモ也

老子經
吾所以有大患者
爲吾有身

寸有忘ルヽトナルヲウケテ

立文字内裏ニ常ニオハシテ心ノヽニオノモトモオハレニサス心也文ヲヨメルヤウニ裡ヘテ中絶ル心ヲモテ
メ行ヘルヘシ

文字ノ

百八

さ寄逢て後絶くこれヲヨメリ 恋ハ猛逢ニテ後ハ
程に成ヌレハカノ思
リシヲメヤセ泣シ氣

百九

勅云尚侍貴子入

後撰ノ作者

文徳太子宮天慶元年任尚侍貞信公

百十

源長城 後撰作者

長城問

百十一

後撰雑二詞書ニヨリテ侍ヲホセヲ関院ノミニトアリ

百十二

後撰云ける家ヽ萩原院
方ニうつりすみ侍ける平女
都人ゝそもみよし
虫のねにうつる野辺
の山吹の花

信明 後撰作者
の忠男

女ノ初アヒ〆ル男ニ川ヲテヲヒ川ヲテヲヒニセント也
俊川ノ後朝ヲイヤニセント也

百十三

藤原忠通中納言家輔四男

日ノクレハ終日也
ニチアヤハ雨降物トノ詩衛風習ヲ引ス陽ニ雨ノアリ哥心ハ東月アリトモ雨ハフルニ我思人ハ我ヲスサメヌヘシハヤナラスキタルヲラストヨメリ
毛詩云其ハヒ其雨ト其雨而杲ヲ出日ト詳ニ
箋云人言其雨ト其雨而杲ヲ出ト詳ニ
日後出ト徳我言ニ伯旦来ト伯旦来則ハ杲来ヲ見男ヲ恋ル哥也

百十四

賀茂大人

百十五

百十六

思ふそ隠りなまてりけり
袖ちかくかさねしかどもなれぬるの
七夕ニ日中ルル衣ナトカスヘテアルヘシ
イタツリ思テノ逢竹ヒ人チヨリヨオモ竹ハル心
わかぬまもおほかりけるを
後撰作者天暦ノ乳母ト但オホツカナシ

百十七

あきのよのつゆおほかりける時おいかきのめれ(?)やの
三条右大臣ニヤ
しものふそてのひとつ
夜ハ殊深キ物ナレハ兼テ秋ヲ頼メシ故ニ今ヨリ夜ノ袖ニヤルニヤ木草ノ葉ニ
わきさへ秋をまてとなのみしてのあき
家ハヨクヨユヘシコトノ葉ニ今モヤヽシレルトナリ
いゑとうれのはゆのちるの露さ

とかれ
是モ右大臣ノ哥ニヤカノ卿ノメカヒニ折ナト成ヘシ
わきさえ川つゆもとゆてこのちる
まとめふしそいろうりけ
百十八

そんひとろむすめまぬとく
なかけくもおもけるぬるの中と

百十九

桂のみこにしのひて
八文字旧ヨリ文リ
ゆふ〳〵とそのはしとをゆふくるそ
そてりかみとのへ山のとおそ
袖ニ旧トハアルトイハントテ也

百二十

閑院のおほいまうちきみ
後撰作者
ゆきまゆむしのもとのそふとそる
むしよりおほくありそうみの
越中也
はまのまさこはかすもしらす
荒磯海テ越中ニアルヘカラス

百廿一

勘云
藤真樹延喜十年正月蔵人兵部丞十二年式部丞十三年叙十二月刑部少輔弾正忠保生男右大臣是公後
おもふ人ありとなけれとおもしろき
まつのまそふりそかりけりつまひとおもく
なくとなりかはりそてはかめんものみえ
オソロシキヤマイセシタニアルニ逢フサヤマニアトモ
あらくしてかみしあなりのかふて
病ヲソヘテヨメリ
わかてともさんなんとやはる

時平公ノ北方初メ国経ノメニテ哀忠ヲ公ニ
三竹シ比時平公ヘ奉リ竹シ上也
さ哥也君サキ
似ゲナリ若カリケレハ常ニ
しシテ有レトセサレ
悪シ化ハトアル詞
有トカヤ

中納言
本院乃侍従（時平公）
枇杷大納言
棟梁女

[illegible]
国経大納言長良ノ一男 昭宣公ノ兄也
枇杷大納言ノ手キシニ饗ノ中ニ入テ云テ北方ノ手ヲ引テ出物ニ時平公ヘ
云ニ為也我君サキニハ饗君ニ十ル手ヲ引テ哥ス心我童十モ奉ニト頼ヲ為思召セ北方国経
平仲モ兼テカリ心サシ竹ルヤ一説サキニ業ニ小腹ト
テ小腹ト云心
モ其心侍シハトソ

時平公

成竹ヘキ縁アラニテハミラテ我君サ子ト頼メリシハ只召ニルヤトヒサリ所感竹ハジト也

スゝセハ宿縁也
カク本院ノ北方ニ

昔物語ニ大臣ノ北方ヲ車ニモ乗セ竹シ程ニ乄ガサ子ノシリ取テ此車ニ入ルヤウニテ平仲ヨリテ云付テヨシ付テ去ニケリ大臣ハ見竹ス
成テケル北方又見ケル
ニ袖ノ下ニミチノク紙ナリヤリテヨシ付ケルヤヤレト思テミシハ忍フル人ノ手ニテ物ガラ岩松ノ岩ツシイハ子ハコソアレ悪シキ物
トナニ有ケル車ニノリ
シ程下カサ子ノシリ
イレシハ是ニコソ有ケレトオホシケルヲルへノ語シハ若君ノカセナニ云テ母ニミセ奉シトテヤリタリケルトモアリ

昔セシ我兼コトノカナシキハイカニ契リ成ケシニ哥ヲ児ノカヒナニ云テ奉レトイフニ若君見セケリ十イシクナ
又カヒナヒ手テ色シ
現ニテ誰契ケシ定
ナキ夢ノチニ々タトル
我ハ我カハトニミ是
ホノ哥ニヤ
此ノ後状寛ニ
見ヘタリ

定国 高藤公男

[illegible]
不意也

時平公

[illegible]
鐐階ナトノモトニ續松持ナカラ大将ノ御セウソコトテヤ也

コト更ニトハ時平公ノイツハリシ物シ竹タヨリニカトノ竹故只召殿ヘワサトオト更ニオハシトセ也白キニシハ兜ノソテニケルトアル
詞ヲタツテテカクノ更ダリシ夜
半ニミシモト定切ヲアラハシタリ奇玄ノ即妙ノ哥也カサキノハミシイ袖中抄ニサニ侍従百人一首ノ抄ニアリ

[illegible]

百九十八

兄ハ兄也

おとこしたりけるをんなのむすめをあはれとて
わかうえんとひとをとかくよかりといひ
ひとりおとこのもとよりこのめふりしてきぬ
てうのかひをとなむいひやりけるそれ

まろかやとの日ゝにむすさうかみ（うはなりニ…トヨメルニ同じ）（只若キ人也）
むすひしわれまてしまりをり

とかきてやりけるをこれかへりことゝもちらさむす
めとなんありける

百九十九

つくしにありけるひかきのこといひけるは（後撰作者也筑紫ノ遊女成シトゾ）いとらうありをかしくてよを
へけるものになんありける年月
かくてありわたりけるをすみともかさわきに
あひていへもやけほろひものゝくもみなとられはてゝ
いみしうなりにけり

哥ニミトモカウテ侍リ又葉秋ニモ帥大貳赴任上古友千如此ト侍ル真範大貳ナリシメヲ侍侍ルモ

雉堂ミテ乙ハ多クム涙クサナトノ乙

後撰ニハ年フレハ我黒髪モト侍リ白川ハ肥後国阿蘇山ヨリ出ル川也水色白如粉ト云リ
ミツワクムトハ老カミル也又云ミツワサスト云ヒ二ニ同ジ
左右ノ勝カレラトオトガイノ所ニヨルヲミツワサスト云ヒ二ニ同ジ

底ノ心也

かゝりともしらてやたいにうてのつかひに
てくたりたまひてそれかいへのありしわたりを（使ニ下リシ野大貳ト云ハ小野好古也然ルニ後撰集ニ檜垣ガ哥ノ詞ニハ大貳藤原興範ト）
たつねてひかきのこといひけん人にいかて（必ズ参内召乙姨給酒肴次召御前給禄蔵人傳禄件禄白褂一領御衣一襲也延喜興範）
あはむいつくにかすむらんとのたまへは
このわたりになむすみ侍りしなと（ウタカヒナシ然レトモ此物語ニハ野大貳トアリ興範ハ延喜十七ハ異説侍ル二ニヤ委知者ニアキラメ）
ともなる人もいひけりあはれかゝる
さわきにいかゝなりにけんたつねて（大貳ノ内ニ侍ル人ノモ乙年ノ人ヲ能知ル也）
しかなとのたまひけるほとにかしら
しろきをうなの水くめるなむまへより
あやしきやうなるいへにいりける（堀ヰ老カヅラ也）
ある人ありてこれなむひかきのこと（大貳ノヲ也）（蒙何ゾトアルヲ云ヤリ賤女也）
いひけりいみしうあはれかりたまひて
よはすれとはちてこてかくなんいへり
ける
むはたまのわかくろかみはしらかはの
みつはくむまてなりにけるかな

アコメ袍ノ字也萬
垣草ニ説ク待リ一説ニ舞キヌノヤウナル物
テヤトノヤウニアル物
トヨトモアリサ物語ナニヲ見ルニ後ノ説可然ノ大貳檜垣ニツカハシメルヤ
ヌカサヌキルヲヤメ
めひとうら○ぬそ旅館ヲ云ヘシ

百三十

ふなりくへ本歌
麻ノ鳴ル比紅葉スル物ナレハ合
テカリヲメリ鄭
風ニ深ルトヤラカ如シ

百三十一

ひひとそのふ
のまりくるかうる
まくいもりり

まこれる
とそすをを
わそやまる
いとなつけり

百三十二

これなりけり女
ふかおとを
ふりくる
すると
なんそりけり

百三十三

これなりけり女
ふかおとを
ふりくる
すると
なんそりけり

百三十四

先帝ノ
ありそ
物ノ時
る
とのむ

百三十二

ふりくる
ふかおとを
ふりくる
すると
なんそりけり

百三十三

古哥秋ノ八月中ノ
古哥男ノ京ニ行トテ其月中ノ
ふかおとを
ふりくる
すると
なんそりけり

百三十四

古哥秋ノ八月中ノ
一説凡ノ西ノリフテハス
フスサヒヨノムノトヨヨリ心ヤウキトヨメリ
先帝ノ
ありそ
物ノ時
る
とのむ

ᠨᠢᠭᠡ